

読書っていいかも！（一〜三年）

―読書指導を通して学習実感を与える―

読書の価値を実感させる

中学生への読書指導は、読書の価値をいかに実感させるにかかっている。そのためには、計画的な読書指導を通して、本のよさとともに「このことを学んだ」という学習実感を与えること、つまり、本の魅力に力を借りて、「指導すべき内容（身につけるべき言葉の力）」を指導することが大切である。

実践1 継続的な指導で学習の下地をつくる

- ① 学習実感を得ながらすすめる『読書ノート』（一〜三年）
「読書習慣をつける」と言うのはたやすいが、学習者・指導者ともに、相応の努力が必要となる。『読書ノート』は、細かな手びきのもと、後述の内容を三年間に渡って日々書き記していく、月末に、さまざまな表現手段（ポップで紹介）「マイベスト本スピーチ」などを使って、ノートに書きためた情報や自分の考えを友だちと交流する。これには、次のようなねらいがある。
- ② 自らの読書傾向を自覚するとともに、友だちの読書傾向や情報収集の仕方に学び、次の読書へつなげる。
- ③ 目的に応じて本を選び、その目的に沿った読み方を選択し、自ら読み進めていく力をつける。

- ④ 指導者が各学習者の読書傾向を捉え、効果的なアドバイスをを行うことで読書の幅を広げる。
- 国語科の学習と計画的にリンクさせながら本実践を継続することで、言葉の力をつけながら、本を見る目が育っていく。読書の質の向上という点においても有効な取り組みである。

実践2 自らの力で読書生活を切り開いていく

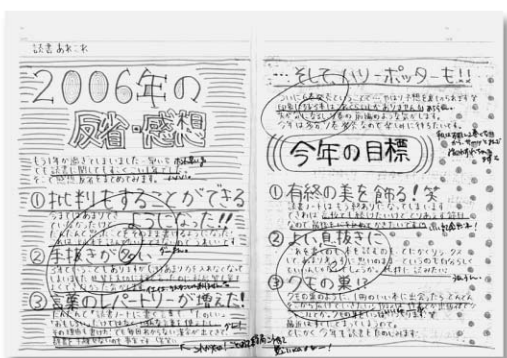
- ① 自分たちの手で学校図書館をつくる（三年）
読書生活全体を視野に入れて学習活動を考えていくと、現実の場面に即した必然性のある学習が展開できる。ここでは、学習者の読書生活の支えとなるべき学校図書館のさまざまな課題を抱える現状を学習材料にし、使い勝手のいい、親しみのある学校図書館にするための工夫を考え、提案し、改造するという流れを仕組むことで、自分の考えをまとめ、表現していく能力の育成を図った。学習の流れは以下の通りである。

- ② ①を通して考えた改造のアイデアを交流し、もう一度自分たちの学校図書館を見直す。（獲得した知識を交流し、どのアイデアを生かすかを話し合いで決定）
- ③ 企画書一枚を作り、プレゼンテーションを行う。（企画書の書き方）を学習し、二年P98「プレゼンテーション」を活用して発表
- ④ 各クラスの代表の企画書をもとに、実際に学校図書館の改造に取り組む。（学校長に企画を提案↓話し合い↓実行）

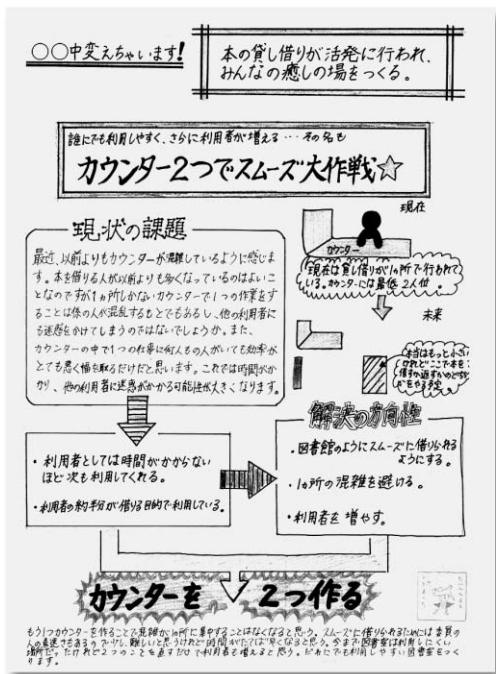
新しい指導を考える会

- ③ 自分が得た情報や、自らの考えを効果的に表すためのさまざまな表現方法を学習し、自分の表現に役立てる。（例えば、「ポップで紹介」であれば、本の基本情報の見方（奥付の読み方）に加えて、①キャッチコピーの作り方とその効果②引用・要約について③人を引きつける紹介の仕方を学習する。）

- ① 読書ノート 記入のポイント
まだ読んではいないが読みたい本
- ② 読んだ本
実際に読んだ本
- ③ 読書あれこれ
読書を話題とした新聞や番組の感想、友だちや家族との本に関する話題、愛読書や蔵書紹介、本屋さん探検記など、読書に関することなら可
- ④ 読書生活を振り返る
友だちとの読書交流を行う。交流方法を変えながら、指導すべき事項を指導
- ⑤ 手びき、プリントなど



▲批判的な読みの必要性、語彙の増量を自覚した『読書ノート』例



▲学習者が作成した企画書例

目ざす姿

わたしにとつての読書ノートは、勉強の一部ではなく、生活の一部でした。わたしはあまり勉強が得意なほうではないけど、読書ノートだけはとつてもはかどりました。一年生のとき、こんなことをやらされるのかと思っていただけで、やり出すと止まらないんです。（中略）今まではあまり敏感ではなかった本のこと。この三年間でわたしは大好きになりました。読むこと、書くこと、考えること…。読書ノートはたくさんのお話を教えてくれたし、学ぶことができました。

▲『読書ノート』からの抜粋

読書生活を教材化する視点は、身につけるべき言葉の力を明確に位置づけながら、さまざまな言語活動の設定を可能にする。読書指導は、自分の力の伸長に手応えを感じつつ読書の価値を実感できるものでありたい。そして、読書という行為が「生活の一部」になれば、こんなに心強いことはない。